よみがえれ別府市公会堂

―近代文化遺産―

星野純郎
大塚俊英

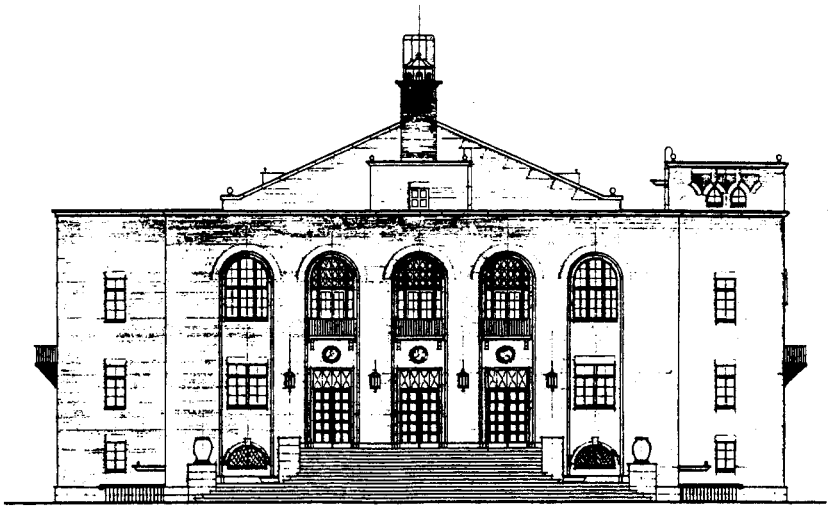
「別府史の公会堂落成式
いよいよ新装成って廿九日盛大に挙行

逓信省技師吉田鐵郎氏の設計になる別府市の公会堂は、昭和二年四月より市内田の湯上麻生太吉氏別荘跡に総工費三十万円を以て起工し、佐藤、池田両技師の監督で工事を進めていたが、此のほど完成竣成し、内部の装飾を了へたので、廿九日官民多数を招き、盛大な落成式を挙行した。（昭和三年三月二九日『豊州新報』）」

大正十三年に別府市となって以後、湯の町別府の発展は目覚ましく、ヨーロッパの皇室や貴族、大使公使などの外交官をはじめ、国内では文士や文化人などの遊覧客がぞくぞくと訪れるようになった。別府公会堂が落成した昭和三年は、別府駅前と北浜を結ぶチンチン電車が開通し、「大阪通いの関西汽船」が桟橋に大勢の遊覧客を運び、亀の井遊覧バスでは美声のバスガールが七五調で地獄巡りの案内を始めた年である。大正が昭和に変わり別府市も時代の先端を行く活気のある都市に飛躍しようとし始めた年でもある。

初代市長となった神沢又市郎は、「泉都別府に公会堂無きは一大欠点とするところなり」と、国際都市の名に恥じない公会堂の建設を強く市議会に訴え、ついに実現した。

設計者である吉田鐵郎は、大正八年に東京帝国大学建築学科を卒業して、建築家のエリートのだれもが望む逓信省営繕課に勤務する若手の逸材であった。吉田がこれまでに手懸けた建造物に公会堂はなかった。吉田は大ホ



ールを中心とした公会堂の設計にあたり、彼が心酔していたラグナル・エストベリーが設計した北欧建築の代表作といわれるスウェーデンの「ストックホルム市庁舎」のイメージに重ねて公会堂の設計図をひいた。リズミカルなアーチ、堂々とした外壁、瀟洒な窓枠や装飾など、どことなくモダンで北欧的な異文化を感じさせるものがある。

別府市公会堂は、市民を対象にするだけでなく、内外のいかなる利用者にも十分に耐えうる十分な設備を備えていた。公会堂のメインとなる大ホールの二階にあるバルコニー観覧席は九州ではもっとも早く、音響も非常によく、ホールとしては九州で最古のものといわれる。ゆったりとしたロビー、地下大食堂、二階小食堂、貴賓室やビリヤード室まで備わった当時としては、威容を誇る内容のものであった。

この記念すべき建物も六十年を経過した。そのあいだ時代の流れのなかでたびたび手が加えられて、今では創建当時の姿が辛うじて残されているにすぎない。心ない人々からは、自然倒壊を待たずに撤去してはとの話もでた。

しかし、復元再建への動きが見えてきたことはこの上ない喜びである。

ガラスとコンクリートを素材として、計算され尽くした合理的な近代建築に対して、近代化遺産となる建物は創建当時の世相をうつして、それなりに豪華であり優しくその温りが緊張した気持ちを和らげてくれる。

この公民館について「大分県の近代化遺産—近代化遺産総合調査報告—」には、『別府市公会堂の建築は、別府市はもとより大分県にとっても規模・質ともに最も重要な近代建築遺産の一つである』と述べられている。地方に残る昭和初期に建てられたの本格的な鉄筋建造物として、また、日本が近代化するために文化的な役割をはたした近代化遺産として、別府市では有形文化財に指定している。やがて国や県指定の重要有形文化財に指定される動きも見えているそうである。

ノーベル賞の授賞式が催されるストックホルム市庁舎がデザインの下敷きにされた別府市公会堂は、活用の方法も自然と決まってくると思う。セレモニーや、講演会、演劇、コンサート、個展と参加するもの全てが、他所では感じ得ない独特の感慨が生まれる殿堂でありたい。創建当時の公会堂に限りなく近い復元をすべきである、と言う声がある。もっともである。

活力のある別府の象徴として建てられた公会堂の復興は、沈滞気味の別府に喝を入れるものになるのではないか。そして、別府市民は、吉田鐵郎が残した貴重な建造物のメモリアルとして後世に伝える貴重な文化財をもつことになると思う。

（この稿　星野純郎）

昭和三年別府市公会堂日誌より

四月一日　日曜日　晴

一第一號室

全国新聞記者大會ノ為使用（主催・別府日刊新聞聯盟）

午前十時三十分開會　仝十一時三十分閉會

出席人員五十五名

一第二號室

右出席者ノ休憩所ノ為使用

一第三號室
仝　右
一地下食堂
博覧會協賛會主催ニテ宴會ヲ行フ
午後四時開會仝五時三十分終了出席人員五百八十名
一臨時人夫壱名　雇人各室ノ掃除ヲ為ス（以下略）
一下足人夫壱名雇入午前八時ヨリ午後六時迄（仝前）

四月三日　火曜日　雨後晴
一第一號室
午後六時ヨリ三曲演奏會ヲ行フ　午後十時三十分終了　入場人員約千百名　主催者木村男也

四月五日　木曜日　晴
一第一號室
駅長會議ノ為使用　主催者別府駅長　午前九時開始
仝十時三十分終了　出席人員五十九名

四月六日　金曜日　晴
一第二號室
駅長會議ノ為使用　主催者別府駅長
午後一時開始　仝二時三十分終了　入場人員三十名

四月七日　土曜日　晴
一第一號室
愛国婦人會別府支部総會ノ為使用　午後九時ヨリ午後一時半迄
午後　時ヨリ　仝一時迄大食堂使用ニ付電燈使用
出席人員三百名

四月八日　日曜日　晴
一第一號室
釈尊降誕會ノ為使用　主催者海門寺
午前九時ヨリ午後五時迄　入場人員約千五百名
故障箇所第一號室腰掛後方七十二箇破損

四月九日　月曜日　晴
一第一號室

大分県仏教聯合大會ノ為使用　主催者海門寺
午前十時ヨリ午後四時迄出席人員弐百名

四月十日　水曜日　晴

一第一號室
九州在郷軍人聯合大會ノ為使用　主催者別府市在郷
軍人聯合分會長　長谷部照一郎　出席人員六百人
午前九時開始　午後四時終了

一地下室食堂ニ於テ午後　時三十分ヨリ一時半迄宴會ヲ
行フ

一午後四時ヨリ地下室食堂ニ於テ宴會ヲ行フ　出席人員
六百名　午後七時終了

四月十一日　水曜日　晴

一第一號室
午前
大分県下在郷軍人分會長會議ノ為使用　午前九時開
始正午終了　出席人員二百名　主催者大分聯隊区司
令部

午後
天台宗講演會ノ為使用　主催者海門寺　出席人員五
十名　午後一時開始午後四時三十分終了

四月十二日　木曜日　晴

一第一號室
宮崎、都城、大分、別府市會議員交歓會ノ為使用
主催別府市　出席人員百二名　午前十時開始　午後
一時三十分終了

一第二號室
右休憩室ニ使用

一第三號室
右　仝

四月十三日　金曜日　晴

一第一號室
九州清涼飲料水同業組合大會ノ為使用　主催者梶原
慶三郎　出席人員六十名　午前九時開始　午後四時
終了

四月十四日　土曜日　晴

一第一號室

1九州小学校長會議ノ為使用　主催学務　午前九時開始　正午終了　出席人員三五〇名

2浄土宗講演會ノ為使用　主催海門寺　午後一時開始　仝五時終了　出席人員二十名

3午後六時ヨリ仝十一時迄久留島氏芸術講座ノ為使用　主催者大分新聞記者森川謙二　出席人員六百五十名

一第二號室

1大分県立女学校同窓會別府支部総會ノ為使用　午後十時開始　午後四時終了　主催者川村初音、丸山マチ子　出席人員四十名

2午後六時ヨリ仝九時迄久留島氏招待宴ノ為使用　出席人員三十名

一第三號室

市長主催九州警察部長招待宴ノ為使用　午後一時開始　午後二時終了　出席人員十八名

四月十六日　月曜日　晴

一第一號室

午後六時ヨリ仝十時迄日向デー活動写真會ノ為使用　主催者中外産業博覧會宮崎県事務所属長友長三郎　出席人員約七百名

一第二號室

九州各市学事主任會ノ為使用　午前九時ヨリ正午迄　主催市学務

一第三號室

右休憩室ニ宛ツ

一日向デー電灯取扱ノ為午後五時ヨリ仝十時迄技術員濱田勤務ス

四月十七日　火曜日　晴

一第一號室

仝九州理髪組合大會ノ為使用　主催者白石喜一郎　出席人員七五〇名　午前九時開始　午後三時終了

一第二號室

九州学事主任會ノ為使用　主催市学務　出席人員十九名

四月十八日　水曜日　晴

一第一號室

日本會員掖済會大分県支部総會ノ為使用　主催大分県掖済會　出席人員約千三百名　午後一時開始　仝四時終了

一貴賓室

右総會ニ対シ伏見宮殿下台臨ニ付使用

一第二號室

宮殿下ニ奉ル茶ノ準備室ニ使用

四月十九日　木曜日　晴

一第一號室

日蓮宗寺院大會ノ為使用　主催者本光寺　出席人員千名

一第三號室

九州社會教育主事會議ノ為使用　主催者県社會課　出席人員十名

四月二十日　金曜日　雨後晴

一第一號室

大分県下市町村庶務主任會ノ為使用　主催県庶務課　出席人員二百五十名　午後一時開會　仝二時三十分終了

一第二號室

九州各市長會議ノ為使用　主催別府市　出席人員不明　午後十時開始　午後零時終了

一第三號室

九州各市會議長會ノ為使用　主催別府市　出席人員不明　午前十時開始　午後零時終了

一貴賓室

右休憩室ニ使用

四月二十一日　土曜日　晴

一第一號室

大分県醤油同業組合大會ノ為使用　主催桑原惣五郎　出席人員三百名　午前十時ヨリ午後四時迄

一第二號室、第三號室

前日ニ同シ

一貴賓室
前日ニ同シ

四月二十二日　日曜日　雨

一九州歯科医師大會ノ為使用　主催荒尾昇曹　出席人員
約三百名　午前七時ヨリ午後六時迄

一第二號室
大分県下公証人大會ノ為使用　主催者後藤嘉一郎
出席人員十名　午前十一時ヨリ午後四時迄

一第三號室
歯科医師大會出席者休憩室ニ使用

四月二十三日　月曜日　晴

一第一號室
九州歯科医師大會ノ為使用　主催荒尾昇曹　出席人
員二百名　午前八時開會　午後六時終了

一第二號室
九州上水道主任會議ノ為使用　主催市水道課　出席
人員二十六名　午前九時開會　午後五時終了

一第三號室
右休憩室ニ使用

四月二十四日　火曜日　晴

一第一號室
午前
大分県下税務協議會ノ為使用　主催県庶務課　出
席人員五百名　午前九時ヨリ　仝十一時三十分迄
午後
全国菓子飴同業組合大會ノ為使用　主催家近徳市
出席人員三百名　午後一時ヨリ　仝五時迄

一第二號室
九州上水道主任會議ノ為使用　主催市水道課　出席
人員二十六名　午前九時ヨリ午後一時迄

一第三號室
右休憩室ニ使用

四月二十五日　水曜日　晴

一第一號室

午前
大分県下盲人大會ノ為使用　主催大分県盲唖学校
長　午前九時開會　仝十一時四十分終了　出席人
員約四百名
午後
全国盲人文化大會ノ為使用　主催者大分盲唖学校
長　出席人員約三百名　午後一時開會　仝六時終
了

四月二十六日　木曜日　小雨

一第一號室
大分県市町村勧業主任會議ノ為使用　主催市勧業課
出席人員二百名　午前十時開會　仝十二時終了
大分県洋服同業組合大會ノ為使用　主催別府市斉藤
富助　出席人員百六十名　午後一時開會　仝三時三
十分終了
一第二號室
大分県木炭同業組合會議ノ為使用　主催者大分県山
林技師名和義英　出席人員四十名　午前十時開會
午後零時三十分終了

四月二十七日　金曜日　晴

一第一號室
大分県仏教婦人聯合會ノ為使用　主催者西法寺速見
宗慶　出席人員約千五百名　午前九時開會　午後一
時終了
一第二號室
全国師範学校長會議ノ為使用　出席人員二十八名
主催大分県女師校長長崎惣一　午前九時開會　午後
三時三十分終了
一貴賓室
右休憩室ニ使用

四月二十八日　土曜日　晴

一第一號室
真宗本派大分県寺院大會ノ為使用　主催者速見宗慶
出席人員五十名　午前九時ヨリ午後一時迄
一第二號室

午後一時ヨリ大分県魚市場大會ノ為使用　午後四時三十分終了　主催者岩尾米造

四月二十九日　日曜日　晴

一第一號室

午前九時ヨリ九州飲食店同業組合大會ノ為使用　主催者毛井睦治　出席人員約七百名　午後六時三十分終了

午後七時ヨリフオード自動車會社宣傳活動写真會ヲ行フ　主催喜多代幹雄　仝十一時終了

四月三十日　月曜日　晴

一第一號室

大分県水産集談會ノ為使用　主催者大分県水産會出席人員約千名　午前九時ヨリ午後四時迄

五月一日　火曜日　雨

一第一號室

午前

納税組合表彰式ノ為使用　主催者市税務課　出席人員約二百五十名　午前十一時開會午後一時終了

午後

満蒙宣傳ノ為活動写真會ヲ行フ　主催下関満蒙案内所　午後七時ヨリ仝十時迄　入場人員約千名

五月二日　水曜日　晴

一第一號室

午前九時ヨリ免囚保護主任會ノ為使用　主催大分刑務署長　出席人員約百五十名　午後四時三十分終了

午後六時ヨリ音楽と舞踊ノ會ノ為使用　主催者梅田凡平　入場人員約七百名　午後十時終了

五月三日　木曜日　晴

一第一號室

大分県度量衡組合會の為使用　主催県廳　出席人員約二百名　午前九時ヨリ午後一時迄

午後七時ヨリ仝八時迄北海道宣傳活動写真會ノ為使用　主催北海道廳賛仰部

五月四日　金曜日　晴

一第一號室

大分県米穀商大會ノ為使用　主催者大分市磯崎徳三郎　午前九時開會　午後四時終了

午後七時ヨリ北海道宣傳ノ為活動写真映写會ヲ行フ

主催北海道廳　入場人員約八百名　午後十時三十分終了

五月五日　土曜日　晴

一第一號室

九州肥料組合大會ノ為使用　主催者馬場雄蔵　出席人員約百五十名　午前九時ヨリ午後四時迄

参考文献

別府市誌（昭和八・五九）　別府市

別府近代建築史　別府観光産業経営研究会

大分県の近代化遺産　大分県教育委員会

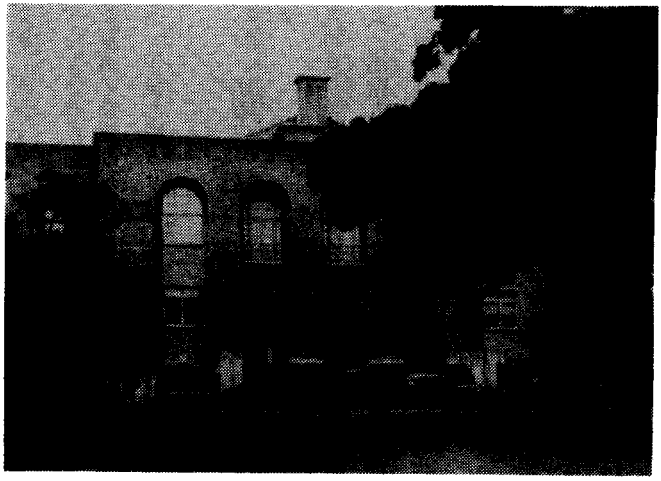
別府公会堂日記（昭和三）　別府市立図書館

（この稿　編集部）

〈エッセイ〉

思い出の別府公会堂

大塚俊英

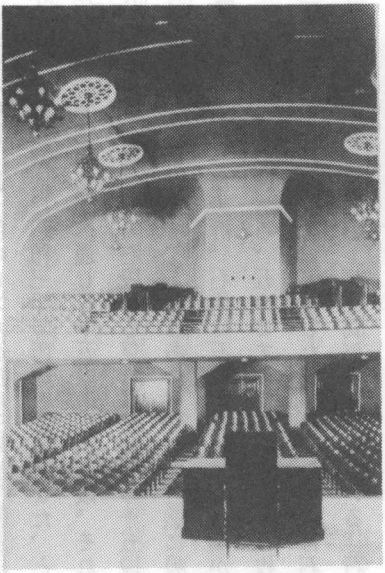


楠と松の樹間に黄土色のレンガ造りの三階建、欧風様式の別府市公会堂は、昭和三年の市民を驚嘆させた、と聴いている。正面玄関へ通じる十五段の広い石段。それは一段目の底辺にあたる石段から見れば玄関前の十五段目は梯形の一辺になって、二階にあたる玄関に自然に吸い寄せられるような設計。石段は五段あたりで踊り場があってその上に十段ある。五つのアーチ型の窓下の六枚の正面の鉄の扉は彫刻をほどこした物。石段の両端は石の壁に囲まれた石室といった空間が設計されている。石の壁には湧き水の噴出口があり、そこから出てくる水は池をつくっている。また、もうひとつ石の壁の台上には大人の背丈くらいの石の壷が置かれている。左右対称に対になった石の壁。公会堂の近くにいた僕は子供の頃この石の壁と階段で遊んだ。じゃんけんで階段を上がり降りしていた小学生、石の壷の横に寝転び夜空の星を仰ぎながら将来を語り合った高校生の頃があった。

公会堂で最初に記憶しているのは、昭和十年の頃か、公会堂前の広場に温泉祭りの仮装行列がここに集まって出発したのを見ている。市役所の職員や青年、町内の有志が「温泉大将軍」のテーマでそれぞれに役割、衣装をつけ、のぼりを立てていた。僕はほんの四・五才であったがその奇妙な大行列を胸に焼き付けている。その頃僕の叔父などは大阪からわざわざ仮装行列に参加のため帰郷していたそうだ。それから昭和十二年の南京陥落の祝賀の提灯行列もここで準備して、出発した。この時も公会堂は晴れがましい会場だった。市役所、中学校、青年学校、在郷軍人、国防婦人会、隣組などから出て来た市民が階段から広場を埋め尽くし、手にはほうずき型の紅い提灯を手にして、ブラスバンドの合図、万歳で紅い提灯を高く上げて勝利を喜び、夜の市内を行進して行った。そんな祝いごとの起点となっていたようだ。

戦争が激しくなり、空襲警報の合図のため、市役所と公会堂の二箇所にサイレンを取り付けることになり、市役所からサイレンが移動されてきた。「マリアナ基地を発進せる敵数目標は足摺岬南方を北上中。北九州地区空襲警報発令」のラジオの声で公会堂の屋上に取り付けたサイレンが鳴りだす。短く十回も吹き鳴らすので、近くに住む僕は頭から押さえ付けられた感じで「良くわかり

ました」と何時も防空に備えたものだ。いまは役目を終えたサイレンは広場の南の植込みに置かれている。写真にでも撮っておかなければ、と思っている。十九年の終わり頃か、公会堂の建物が防空上、目立つというので、ある日突然レンガの壁にコールタールをぶち掛けたような迷彩がほどこされた。広い壁に迷彩は難しいかった、と思われる。黄土色の上に黒のコールタールはブチのように醜い縞もようになって、黒い滴をあちこちに垂らしていた。北欧の紳士がどぶ溝に落ちたようだった。こんな大きな建物だからあまり効果はなかったろう。



さて公会堂の中身だが、正面六枚の扉は彫刻で縁取られ重くずっしりとして、開かれるとそこは大理石の低い階段が八段くらいある。天井には星の形をしたシャンデリア、キューピットの立っている手洗い池、星と三日月をデザインしたステンドグラスが南北の窓にデザインされてロビー。正面の大ホールに入ると目に付くアーチ形の大天井、クリーム色の見上げるような高さがあり、僕ら子供は入場すると決まって天井を見上げていた。豪華なシャンデリアが沢山の電球を輝かせて何本も吊り下がっている。「あの電球が切れたらどうするんやろう」「あれが落ちてきたら大変や」などと家庭では考えられない心配をして豪華さを見つめていた。二階の席はバルコニー式になっている。一階のロビーの両端から二階席への階段がある。二階席の反対の東側に貴賓席、小会議室などがならんでいた。市役所主催の行事、市議会の議員会議、校長会主催の行事、駅、在郷軍人会、企業の会議など、この高貴の雰囲気の殿堂には子供の僕らにはめったには入れなかった。が、時々、市民映画会が開催されていた。

ニュース、文化、時局解説だけの映画を七、八本上映してくれるだけだが、文化の恵みに薄かったのか、公会堂が市民に開放されるとどっと集まり超満員になる。千人以上は入って立ち見は何時もの事。勿論、戦争前の僕らは小学生時代。「子供はステージの上にあがって映写幕の裏からみなさい」と言われ百人くらいがスクリーンの裏から映画を見た。左右逆の映像が子供の僕らにはかえって楽しく強烈な印象を受けた。映画の内容は、世界の軍縮会議で軍艦製造の比率が五、五、三で、アメリカ、イギリスが五で日本が三を割り当てられ「けしからん」という解説つきの海軍の時局映画だった。いまは核が対象、あの頃は軍艦だったようだ。

僕が正式な観客となって公会堂の席に付いたのは昭和十九年春。僕が中学一年の時である。この時は中学生が招待された。演説は海軍省の報道部から、短剣姿の凛々しい海軍少佐が「わが国は今戦勝の準備をしている。戦勝祝賀の観艦式はサンフランシスコ、観兵式はニューヨークを考えている」と言ったとき僕らは割れんばかりの拍手をしていた。「その時期は来年夏、諸君もこの栄誉に間に合う光栄に浴して欲しい」と僕らに海軍入りを促した。一年過ぎたら、日本は負けていた。けれどその間に僕らの中学生は何人も海軍に入隊した。何も知らない純粋な軍国少年があの席を埋めていた。僕は二階の最前列にいた。

戦争が終わって公会堂は県下で只ひとつの大会場になった。他は空襲で焼失していた。剣道、柔道の大会から始まった催しものは、のど自慢、放送局の公開番組、演芸会、文化講演会、映画、実演など市民に開放された公会堂は何をしても超満員。

中央から政治家、芸能人などこれまで雲の上の存在だった人がぞくぞくと見えた。印象に残っている人は政治家は自民党の三木武吉、演劇の宇野重吉、作家の野坂昭如、歌手の東海林太郎、藤山一郎など、みんなその姿に存在感があった。三木武吉は胡麻塩の五分刈り頭で、袴をはき桐の下駄、手にはステッキという古武士をおもわせる姿で「吉田くん、鳩山くん」と首相クラスの政治家を君づけしながら政界の裏話、日本の方向を話す豪快さ。それは「わしが日本を背負っている陰の男だ、良く見てお

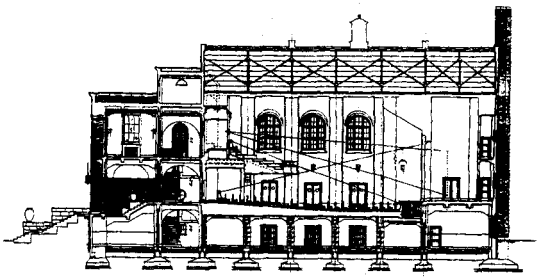
け」と言われているような錯覚に陥る。痩身で、しわがれ声で話す威厳に僕は圧倒されて見ていた。恐ろしくて近寄れない雰囲気で公会堂に集まった市民は水を打ったように聞き入っていた。五十年の間にこんな日本人は消えてしまった。また、別府市の立会演説会は楽しい会場の公会堂だった。別府国際観光温泉都市法案の制定の賛否を巡って、会場は野次と怒号の渦のなかで割れんばかりの熱気があった。あの頃の市民は自由で若く、気力があって何かと言えば公会堂に集まっていた。

地下室には大食堂やビリヤードなどあったらしいが、僕が公会堂と関わった時は無かった。その場所は別府市立図書館になっていた。近くにいる僕は図書館によく通った。夏休みなど毎日だった。南の地下室にはいる入口の階段を五、六段降りると奥に図書館。本は全て鍵の掛かったガラス戸棚には入っている。閲覧の時は係のおじさんに記入カードを提出すると、おじさんが沢山の鍵束をもってくる。地下室は涼しくて勉強に最適で常連の中学生が七、八人来ていた。僕もその中の一人で、僕は小説を読むことが多かった。たまに館外貸出しにすると、補償金の前払いだ。あの頃はどれも貴重な本だった。文化、知識はこれくらいに乏しい時の方が身体のなかに良く入るようだ。公会堂での子供のときの本は良く覚えているから何とも不思議だ。

公会堂が公民館と名前を変えたのは何時か覚えてない。都市の公会堂はみんな改名したのか、それなら仕方ない、と子供の僕は思っていた。それだけに公会堂の名は愛着があった。どんな意味で変えたのか知らないが、五十年後の今でも東京や大阪には公会堂の名の建物がある、と知って羨ましくなった。それに正面の石段が何時無くなったのか、近所にいる僕も気付かないほどのスピードで消えていた。公会堂の名を失って、豪華なあの階段を無くして市民の誇る殿堂はイメージが変わってしまった。時流に乗ったのか、乗り過ぎて先走ったのか、今は、昔の面影はほんの少しだけ。もともと大分県民は、時流に乗ってすぐに対応し、改善、改良、打ち壊しを好むのか、昔の物、建物を壊す傾向がある、と思うがどうだろう。明治維新のとき、大分県は、全国に先駆けて城を壊して新政府に顔を向けていた、という話を耳にしたことがある。

本当かどうか確かめたことはないが、隣の熊本や松山など堂々と城があるのは羨ましい。それに市内でも文化財的な木造建築が無くなっているのに、他の観光地などは、こんな建物を立派に残して観光に役立っているのはどうしたことか。他県の胸の想いと僕らの地元のそれとは少し違っているような気もするが…。とにかく時流に乗るのか、経済的なのか、簡単に改善されてその場を凌ぐのがうまいのだろう。けど、時代が読めないと、壊した直ぐ後でレトロの時代がやってくるから何とも不思議な現象になる。

一年前だった。評論家の俵萌子さんが講演にみえ、挨拶のとき「立派な建物ですね。大事にしてくださいよ。今度来たときには壊してなくなってた、と言うことにならないようにみなさんたのみますよ」と言った。僕はドキッとした。見抜かれているような気がした。が、壊すのでなく、あの公会堂を元の姿に戻したい、という話しがある。元の公会堂になるのは僕としてはうれしい。大変な金額がかかるらしい。が、建物はみんな気軽に利用される物と高貴で近寄れないような殿堂のような建物もあってもいい。市民の誇りになれる物が欲しいと思っている。この公会堂は復元されればその素材十分だろう。楽しみだ。

公会堂に口があればこんな話をしただろう、と密かに僕は思っている。

（図、写真は河村健一氏提供）